

棚田がアートのショールーム

関谷 英市郎

新潟県松代町企画振興課長

山野に現代芸術作品

平成12年夏、新潟県とアートディレクター北川フラム氏の指導のもと、十日町地域広域6市町村（十日町市・川西町・津南町・中里村・松代町・松之山町）の広域事業として大地の芸術祭（越後妻有アートトリエンナーレ2000）を開催した。開催テーマに「人間は自然に内包される」を掲げ、32カ国148名のアーティストの参加による142作品を設置し、7月20日から9月10日まで多数の来場者と住民が熱く燃えた53日間であった。

事業推進にあたり実行委員会では次の3つの基本目標を設定した。

1. 交流人口の増加 2. 地域情報の発信 3. 地域の活性化 である。

来場人口に関しては、目標の20万人に満たなかったものの16万人を超える来場があった。地域情報の発信分野では、アートを素材とした新たな地域づくりとして妻有地域の6市町村が各メディアに取り上げられると共に、第5回ふるさとイベント大賞受賞など大きな地域情報の発信を行うことができた。地域活性化に関しては、建設投資や来場者の消費行動により特定業種に経済効果が認められたものの、事業に対する住民の理解・参加の希薄を指摘されたところである。

過疎地域の広大な山野に現代芸術作品を配置するなど、行政として前例のない新たな地域づくり

の試みであり、この芸術祭に関する各メディアの関心も高くその論調は、期間の前・中・後を問わず評価・批判・激励等々、多種多様であった。自画自賛といわれるかもしれないが地域情報の発信力をはじめ総体的な開催効果は評価されたものと思っている。

無関心から協働作業へ

本事業の担当を命ぜられ「芸術」という概念すらよく分からず広辞苑で探してみたが多様・広範・広義にわたり益々理解できなくなった。大きな困惑の中ではじまった最初の作業であった。芸術に無知なことを本事業のアートディレクターの北川氏に告げると「芸術を分かろうとしなくてよい。楽しければそれでよい。」という答が返ってきた。この一言で気持ちが楽になり、行政職員として未体験の分野を経験することとなった。芸術に関する知識はこの程度のレベルの職員の寄稿であり、作品個々の論評など毛頭できないがこの事業に取り組んで以来、確実に変わりつつある松代町の状況を報告する。

当町は、人口4,240人、新潟県の南部に位置する典型的な山間・豪雪・棚田地域にある小さな町である。有史以来、コシヒカリに代表される良質米の生産地として推移してきたが、基幹産業である農業の低迷に加え、零細かつ急傾斜という過酷な営農条件下にあって過疎並びに高齢化が進行し

ている。一方、第三セクター鉄道ほくほく線の開業や国道253号改良工事の進捗等、年々交通基盤の充実が図られている。

こうした現況を踏まえ、町の重点施策に交流滞在人口の増加を掲げ、宿泊施設・スキー場・道の駅等、交流関連施設整備や多様なイベントの展開を精力的に進めてきたところである。また、早稲田大学、世田谷区及び八王子市職をはじめとする特定の交流先を首都圏に確保し、安定的・効率的な交流促進を図っているが、元来、手つかずの自然があるだけで特筆すべき交流・観光資源が少ない当町にあって、新たな交流・観光ゾーンの創造は緊急の課題であり、当該事業によるアート作品招致については積極的に行った。

松代ステージのテーマは「雪国農耕文化村」とし、広域事業全体の36%にあたる51作品を設置した。ほくほく線まつだい駅南の里山・棚田を中心に恒久作品を集中設置し、町中心部の商店街においては期間限定の仮設作品の設置を行いギャラリーロード化した。

事前の事業説明会においては、「アートは分からない」と無関心な人、「アートで本当に人がよべるのか」などとさまざまな批判や意見はあったが、3月末になって、芸術祭にかかわる首都圏からのボランティア組織「子へび隊」が来町し、住民に芸術祭の周知や協働作業への参加を呼びかける活

動が始まると徐々に変化が生じてきた。地縁・人脈が皆無の子へび隊が何故この地域のために頑張ってくれるのか、このようなひたむきな活動に触発され、子へび隊を支援する家庭や地元の青壮年グループが自然発生的に生まれ、協働作業や芸術祭関連イベントの進め方などについて意見交換と共に親密な交流がはじまった。

5月、雪消えとともにアーティストが多数来町し、作品製作の協働作業が学校や商店街で始まり、駅前ステージに作品群が設置されはじめると住民各層に関心が生まれ、本事業への参加意識が醸成されていった。

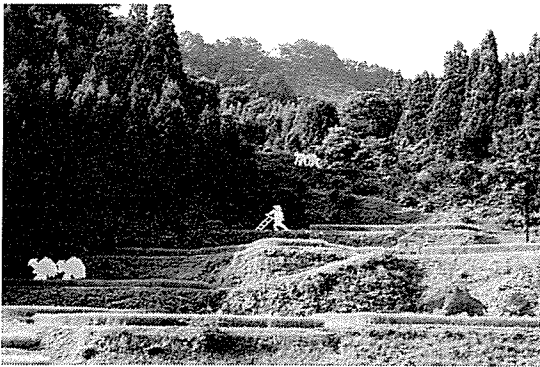
7月19日、当町において地域住民をはじめ多くのアーティストの参加を得て、芸術祭前夜祭が国際色豊かに華やかに行われた。

● 町は一変

開催期間に入り、各メディアが芸術祭開催の様態を報じると過疎地の当町は一変した。早朝より夕方まで駅から商店街にかけて、作品鑑賞に訪れた若者で賑ったのである。駐車場の車のナンバーから想像すると全国規模での来場であったと思われる。こうした賑いを目のあたりにした商店街住民は、芸術祭の効果を実感したところである。

意欲ある住民においては、この事業にどう関わり経済活動に結びつけるか早くから積極的な対応をする者もいた。あるタクシー事業者は、作家と一緒に屋根にフグ?を乗せたキャンペーンカーを運行し、作品をくまなく案内することにより来場者の利便を図ると共にユニークなデザインで来場者の目を楽しませ当町会場の名物となった。

来場者のために作品群の入口には「里の家」と称する無料の休憩所が設置され、町の老人クラブは、ボランティアで子へび隊と共にこの休憩所で麦茶の提供を行うなど里の家の運営にあたった。



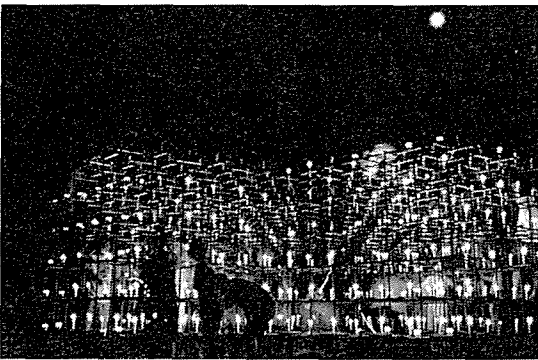
「米の実る里山の5つの彫刻」
イリヤ&エミリア・カバコフ作品

来場者からは炎天下の作品鑑賞の疲れがここで癒されると大変喜ばれると共に、老人からみた子へび隊は年齢的に自分の孫の感覚であり、世代を超えたほほえましい交流が見られた。

20の作品が設置された商店街では、2軒の家庭において来場者にお茶の無料サービスが行われ、歴史ある雪国民家の風情、もてなしの心、会話による交流が大変喜ばれた。

被爆柿の木二世を通して一人一人の「時の蘇生」を目指す柿の木プロジェクトのスタッフは、借家のある集落行事への参加や学校での協働作業を通じ地元の方々と交流を重ねたい絆を育てた。

8月13日と最終日前夜の2回、ポーランドの作家タデウス・ミスロウスキーの作品を使い、それぞれ蠟燭千本の点火と盆踊りのイベントを行った。あまりに神秘的な光景の中での伝統行事は参加者に多くの感動を与えた。また、他市町村担当の多くの子へび隊も盆踊りの輪に参加するなど、住民と一体となり熱く燃えた芸術祭の閉幕を惜しんだ。



「無題」タデウス・ミスロウスキー作品

トリエンナーレ芸術祭ということで、平成12年の第1回をスタートに、平成15年と平成18年にそれぞれ第2回目、第3回目を開催することになっている。第1回の芸術祭を終えて商店街に新たな動きがおきた。次回開催までの2年間に人の流れに空白が生まれないようにと、商店街ギャラリーロード事業を継続していきたいということである。この企画には、第1回の芸術祭で交流のあった子へび

隊や多くの学生も参加しており、芸術祭を通じて形成された人脈の成果である。

町民性の殻を破る

このように交流の形態は様々で枚挙にいとまはないが、この芸術祭に積極的に関わった人々は、来場者との交流による人的ネットワーク構築並びに事業成功の一端を担ったことに大きな満足感と自信を得たと確信している。一方、当町は駅南地区と商店街への作品の集中設置によりその見易さから賑いを確保できたが、作品が設置されず無関心な地域があったことも事実であり、次回この地域の住民をどう取り込むか新たな課題を残した。

平成15年7月の第2回芸術祭開催に向け、一層の交流・滞在人口の増加を目指し、当町では施設・作品等の整備を次のように予定している。松代ステージのある駅南地区に交流拠点施設として（仮称）農耕文化村センターを建設、ここから城山山頂までの棚田には引き続き著名芸術家の作品群を展開することにより周辺一帯をアートのショールームと化し、さらに、補完施設として国県道脇にアート作品を配置したポケットパークを整備する計画である。

日本人は外圧がないと意識改革をしないなどと揶揄されているところである。住民にとって、この芸術祭を通して経験した「アート作品・芸術家・子へび隊の活動・大きな人の流れ」すべてが未体験の外圧?であったのかもしれない。とかく消極的・閉鎖的と言われている町民性が殻を破り「行動しなければ何も生まれず、新しいものに挑戦しよう」という動きが見られはじめていたのである。住民のすべてが理解し賛同しているわけではないが、この先2回の大地の芸術祭開催を計画しており、現代アートを手段にした特異な手法が過疎地域の振興になり得るかどうか正念場である。